

東アジアにおける災難文学研究の展望

—〈東アジアの災難に対する文学的な対応と災難叙事の系譜〉研究を中心に*

嚴仁卿

✉ uik6650@korea.ac.kr

*This work is supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government. (MEST) (NRF-2016S1A5A2A03927685)

1. 災難文学とは

自然災害をはじめとする「災難」は人類の歴史を語るのに不可欠であり、人類は災難と共に生きてきたといっても過言ではない。文明の利器として人類社会に貢献すると思われてきた近代産業化や技術文明は、皮肉にも深刻な気候の変化や予期せぬ自然災害を招き、人類がかつて経験したことのない複雑かつ多様な災難を新たに生み出してきた。さらに、文明の高度化につれて災難の頻度と規模は、ますます増加と拡大の一途をたどっている。世界各地で進む分別なき開発に伴う地球温暖化や異常気象、ときに倫理性を欠いた科学技術の高度化、新自由主義的に基づいた企業活動による環境破壊、経済格差による国内外の紛争の激化やテロの日常化、全地球規模におけるヒトやモノの移動や都市のメトロポリス化などは、災難の現代的性格を如実に示す事例であろう。現代人は、多様で大規模な災難や危険と日常的に向き合うことを余儀なくされているといってもいい。ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck)が1986年に早くも『危険社会(Risk Society)』で警告したとおり、私たちは「災難と危険の時代」を生きており、現代の災難は特定の地域や国家に留まらず、全人類がひとしく直面する共通の問題となっている。

ただし、その一方で、全人類的な課題として「災難」という問題系を見据えながら、それがいかなる文学的な営みと結びついてきたのか、という「災難と文学」の関係について巨視的かつ文明論的な視座から論じるための批評的枠組みは、いまだ十分に整えられていない。すなわち、大規模の災難がしばしば文学界に多大な影響を与え、文学作品が災難とその後の社会変容や文明の推移を克明に描いてきたにもかかわらず、両者の関係性を包括的な視座から考究し、その文学的可能性を解明する試みはほとんどなされてこなかったのである。

こうした「災難文学」を取り巻く現況に鑑みて、高麗大学校グローバル日本研

究院では、韓国研究財団の支援(2016年11月~2019年10月の3年間)により「東アジアの災難に対する文学的な対応と災難叙事の系譜(The Literary Responses to Disasters in East Asia and A Genealogy of Disaster Narratives)」という共同研究に取り組んでいる。本研究は日本と韓国を中心に東アジアにおける災難に関する文学作品を通時的・包括的に体系化し、その定義や文学的可能性を考究することを企図している。そこには、災難を直接的な素材として扱っている作品や作家はもちろんのこと、災難による物質的・心理的な傷を治癒する文学や、文学的想像力を駆使して災難という残酷な現実を相対化し、能動的にとらえ直そうとする作品も含まれる。

なお、辞書的な定義に従えば、災難文学には戦争関連の文学も含まれるが、戦争の場合は「戦争文学」というカテゴリーがすでに成立しているため、本研究では戦争以外の災害、すなわち平時の災難や自然災害、人災に関連する文学を主要な研究対象として設定している。

2. 東アジアにおける災難文学の系譜

日本では2011年の3.11東日本大震災を戦後最大の災害と規定し、韓国では2013年のセウォル号惨事を国家的な災難として規定している。そして、こうした未曾有の災難を契機として、日本や韓国では小説、詩歌、エッセイ、批評など幅広い分野において、災難と文学をめぐる多様な文化的実践が生み出されていった。そして、それは様々な自然災害や人災に直面した現代人の不安や恐怖に文学者たちが鋭敏に反応していった所産であったと考えられる。

こうした災難文学の本質は何かといえ、それは文学的な想像力を通して、様々な差異や境界を越えた「私たち」の問題として「災害」を再体験させ、その記録や記憶を集合化する点にある。それは共感の拡散と連帯の可能性を提供し、共同体の倫理と災害を結び付けた思考を喚起する点において、重要な文化的機能を有している。にもかかわらず、これまで災難と文学をめぐる議論は、ナショナルな境域に囲い込まれ、災難共同体としての東アジア、あるいは災害に対するグローバルな課題について十分に議論がなされてこなかった。この点において「災難文学」という枠組みから東アジアの文学活動を超域的に考究する本研究は、きわめて現代的な研究意義を有しているといえる。

また、現代の災害は、自然災害と人災が密接に結びついている点にも特徴がある。たとえば、韓国の『国防科学技術用語辞典』では「災難」を、(1)敵の攻撃行為による戦時の災難、(2)偶発的に発生する平時の災難、(3)自然現象による自然の災難という三つに区分しているが、近年の災難は発生の原因や責任の所在などが不明確で、自然災害と人災が相互関連した複合的な様相を呈していることが指摘できる。

こうした災害に関連する文学者の営みは、地震の多い日本の文学界で最も活発だったといえる。1896年の明治三陸地震・津波、1923年の関東大震災、1933年の昭和三陸大震災、1960年のチリ震災と東北地方の大津波、そして、1995年の阪神・淡路大震災と、近代以降の大規模災害は、それに関する多数の文学作品を生み出す契機としても作用していった。なお、2011年の東日本大震災が福島原発事故につながり、もはや巨大な災難は一つの国に取まらないトランスナショナルな問題として認識され始めている。そして、こうした地震やその後の災害に対する日本の文学者たちの活発な文学的対応は、「震災文学」、「原発文学」という文壇の批評用語を成り立たせ、災難文学の創作・研究の重要性を示唆するものとなっている。

【表1】近現代日本の災難文学と関連災害の例

発表時期	作家	作品名	ジャンル	関連災害
1867.7.25	山岸藪鶯	破靴	小説	明治三陸地震・津波
1867.7.26	依田柳枝子	やまと健男	小説	
1867.7	田山花袋	一夜のうれひ	随筆	
1867.7	依田學海	永仁鎌倉の天變	小説	
1867.7	江見水陸	磯白浪	戯曲	
1867.7	小栗風葉	片男波	小説	
1867.7	小金井喜美子	高潮	詩	
1867.7	竹屋子爵夫人	軒端しのあやめ	詩	
1867.7	三宅青軒	泡沫	小説	
1867.7	柳川春葉	神の裁判	小説	
1970	吉村昭	三陸海岸大津波	ルポ	
1923	芥川龍之介	鸚鵡	小説	
1923	芥川龍之介	妄問妄答	小説	
1923	芥川龍之介	大震災雑記	体験記	
1923	菊池寛	災後雑感	随筆	
1923	萩原恭次郎	噴き上れ新事実の血	詩	
1923	深尾須磨子	忘れた秋	詩	
1923.11	吉屋信子	悲しき露臺	詩	
1923.11	濱名東一郎	浅草寺にて	詩	
1924	正宗白鳥	他人の災難	小説	
1924	徳田秋聲	不安のなかに	小説	
1924	志賀直哉	震災見舞	日記	
1924	近松秋江	大震災一周年の回顧	体験記	
1927.1	坪内逍遙	大震災より得たる教訓	体験記	
1930	久米正雄	鎌倉震災日記	体験記	

発表時期	作家	作品名	ジャンル	関連災害
1930	久米正雄	際物	小説	
1995.1	佐瀬稔	大地震：生と死	ノンフィクション	阪神・淡路大震災
1995.1	村上春樹	神の子どもたちはみな踊る	小説	
1995.4	アート・エイド・神戸	詩集・阪神淡路大震災	詩	
1995.7	盧進容	赤い月一阪神・淡路大震災鎮魂の詩	詩	
1995.7	阪神・淡路大震災体験集編集委員	その時 1995・1・17：阪神・淡路大震災体験集	体験記	
1995.7	盧進容	赤い月一阪神・淡路大震災鎮魂の詩	詩	
1996.1	アート・エイド・神戸	詩集・阪神淡路大震災第2集	詩	
2002.6	小田実	深い音	小説	
2005.7	横山秀夫	震度0	小説	
2011	和合亮一	詩の磔	詩	
2011	高橋源一郎	恋する原発	小説	
2011	長谷川權	震災句集/震災歌集	詩歌	
2011	川上弘美	神様 2011	小説	
2012	多和田葉子	不死の島	小説	
2012	俵万智	3.11短歌集あれから	詩歌	
2013	いとうせいこう	想像ラジオ	小説	
2013	津島祐子	ヤマネコ・ドーム	小説	
2014.1	岡田利規	地面と床	戯曲	
2014	多和田葉子	献灯使	小説	
2016	古川日出男	あるいは修羅の十億年	小説	
2017	いとうせいこう	どんぶらこ	小説	
2017	沼田真佑	影裏	小説	

なお、古代から地震が多発する日本の震災文学の嚆矢として、鎌倉時代の鴨長明による随筆『方丈記』（1212年）を挙げることができるが、興味深いことに作品誕生800周年に当たる2012年には、東日本大震災1年目と相まって『方丈記』に着目した様々なイベントが実施されている。『方丈記』は日本古典の名随筆として高く評価されると同時に、震災の生々しい記録でもあり、こうした過去の災害文学が現在の災害を論じる際に度々言及されていることは、災害文学の射程の長さの問題のアクチュアリティを物語る特筆すべき事例であった。

一方、韓国ではセウォル号惨事の衝撃が災難・危険社会に対する社会成員の不安と恐怖を呼び起こし、それに関連する文学作品が注目を集めている。ただし、災難文学の始まりはそれよりはるかに古い。1990年代中盤に起きた聖水(ソンス)大橋崩落事故と三豊(サンブン)百貨店の崩壊事故以後、災難文学は本格化したとも見られるが、実のところ植民地期から1980年代にかけても、様々な災難に関連する文学作品が生み出されてきた。たとえば、植民地期には、洪水や台風の被害、旱魃、大火災、伝染病の流行などの災難状況に関する様々な文学作品が残されており、ここからも日本と韓国の災難文学の系譜を比較研究する可能性と意義を確認することができる。

【表2】近代韓国の災難文学と関連災害の例

発表時期	作家	作品名	ジャンル	関連災害
1917	李光洙	無情	小説	三浪津水害
1923.10.26	李相和	独白	詩	関東大震災
1925.3	金東煥	国境の夜	詩	
1925.12	金東煥	昇天する青春	詩集	
1925	崔曙海	大水が出た後	詩	洪水
1925	羅稻香	おしの三龍	小説	火事
1926	宋影	煽動者	小説	
1927	崔曙海	紅焰	小説	
1930	金東仁	狂炎ソナタ	小説	
1930	李箕永	洪水	小説	洪水
1930	嚴興燮	流れた村	小説	関東大震災
1931.5.6~1931.8.27	鄭宇洪	震災前後	小説	
1934	朴花城	洪水前後	小説	洪水
1934	朴魯甲	洪水	小説	干ばつ
1935.11	朴花城	旱鬼	小説	
1936.1	朴花城	故郷のない人々	小説	洪水, 干ばつ
1936	朴魯甲	土手が崩れた日	小説	洪水
1936.5	韓雪野	洪水	小説	
1937.6	韓雪野	賦役	小説	
1938.11	韓雪野	山村	小説	
1938	李光洙	愛	小説	インフルエンザ
1940	金萬善	洪水	小説	洪水



【図1】2008年の四川大地震
に中国で刊行された
詩集の表紙

さらに、日本と韓国のみならず中国でも、2008年の四川大地震の発生時に、約60篇の中国語と英語の詩を両方の対訳を併記した詩選集『让我们共同面对灾难—世界诗人同祭四川大地震(Our Common Sufferings: An Anthology of World Poets in Memoriam 2008 Sichuan Earthquake)』(上海外语教育出版社, 2008年)が刊行されている。このアンソロジーもまた、2000年代以降の東アジア諸国において災難とそれによる大規模の人的被害に対して速やかな文学的な対応があったことを証立てる重要な事例と見なすことができる。

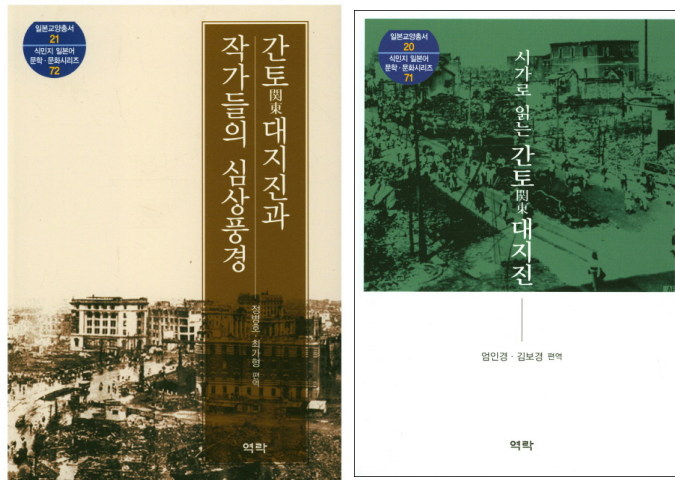
3. 東アジアにおける災難文学の重要性と本研究の方法

本研究は日本と韓国における〈災難文学〉の定義と範囲を明確化し、東アジアにおける災難叙事の系譜と災難文学史の構築の可能性を考究する試みである。地震、津波、洪水、旱魃などの自然災害はいうまでもなく、大型事故などの人災が急増する「災難と危険の時代」において、本研究は文学の果たしうる役割と災難に関する文明論的な言説構造を究明することで、世界の災難文学に関する学問的な土台を構築することを企図したものである。

災難文学とそれを研究する意義としては次の三点を挙げることができる。すなわち、(1)災難の発生時はもちろん、その後の社会層を描き出すことにより、集団的な記憶の形成の一助となる点、(2)文学としての慰めと癒しの機能を多分に有する点、(3)災難の原因や性格を文明論的な立場からとらえ直し、人類社会に広がる危機的状况に対応するための「知」として有用性と汎用性を有する点である。

先述の通り、本研究は日本と韓国との災難文学を対照分析し、さらには、その他の東アジア諸地域で発表された災難文学を参照しながら、「東アジアの災難叙事」という新たな学術的な枠組みを構築することを目的としている。そのため、本研究は明治期から現代に至るまで、地震や津波に関する文学作品が最も旺盛に生産されてきた日本文学に焦点を当てながら、韓国で発表された災難文学に関する体系的な調査と分析を並行して進め、さらに、中国およびその他の東アジアにおける災難叙事に関する調査を加えることで、東アジアの文学者たちの災難に対する認識と対応、さらには作品化する過程を社会文化のコンテキストと照らし合わせながら解明することを目指している。

それにあたって、本研究チームは、日本と韓国の災難文学を三つの時代に区分して調査・分析を進めている。すなわち、一年目は近代初期から1945年まで、二年目は1945年から2000年前後まで、最終年となる三年目は2010年以後である。2010年以後を一つの時期として括ったのは、韓国と日本でこの時期に世界的に話題を呼んだ大震災と大惨事が起こり、それに反応する多数の文学作品や批評が生み出されることで、災難に関する文学や人文知が活性化していったからである。



【図2】本研究チームが2017年刊行した関東大震災関連の随筆と詩歌(詩と短歌)の翻訳作品集

4. 災難叙事に関する研究の可能性

<東アジアの災難に対する文学的対応と災難叙事の系譜>研究は以下のような側面で学問的な波及力を持ち、社会に資すると思われる。

- 一、本研究は「東アジアの災難叙事」という未開拓の分野を調査・研究することで、「災難」という全人類的な課題に関する新たなアジェンダを提示することができる。
- 二、世界レベルで進行している自然災害、環境災害、交通災害、産業災害などを横断する文化論・文明論・人文学的な知を構築できる。
- 三、日本文学専門研究者と韓国文学専門研究者が協働することにより、学際的・跨境的な研究方法を確立し、その研究成果を東アジアの諸地域に援用することができる。
- 四、本研究は学術論文はもちろんのこと、東アジアの災難叙事に関する目録集、翻訳集、研究書の刊行を有機的に推し進め、災難文学の資料的・学術的意義を社会の諸領域に還元することができる。

2016年の慶州地震に続き、2017年には浦項地震が起きるなど、これまで地震

に限っては安全地帯と言われた韓半島にも規模5以上の地震が相次ぎ、災難の対処と安全の希求への関心がこれまで以上に高まっている。本研究チームは、東アジアにおける災難文学研究の成果を広く発信し、災難とその克服や復興の過程において文学がいかなる社会的・文化的役割を果しうるか、その可能性と意義を考究・提示していきたい。こうした作業を通じて、「東アジアにおける災難文学」という新たな学術的アジェンダが確立され、未来の安全社会構築への一助となることを願ってやまない。

嚴仁卿 Inkyung UM

(韓国)高麗大学校グローバル日本研究院副教授。日本語詩歌文学、日韓比較文化論。『文学雑誌』『國民詩歌』と韓半島における日本語詩歌文学』(ソウル: 亦楽, 2015)、「浅川伯教と韓半島の歌壇」(『日本学報』107号, ソウル: 韓国日本学会, 2016)、「A Study of the Formation of Japanese Language Literature in Colonial Korea : Japanese Magazines, Japanese Translations of Joseon Literature, and Traditional Japanese Poetry」(*INTERDISCIPLINARY STUDIES OF LITERATURE* Vol.1, No.1 Hong Kong: KNOWLEDGE HUB PUBL CO LTD, 2017)など。